『國民新報』1939年11月12日

[主張]　半島人と國民精神

七からがであつた。々ははに參してをり、はのをにし、、のをし、としてのとをひこしたのであつた。

とはなんであるか。それは一にはのなりとふいととである。二には一とふかなるである。三に々はをめをひ、々そのをにつて、てのに、をにげることである。は々がのに一せんがためにけられたのであつた。

のにり、としてにをすべきことがあつたである。ひへれば、なるがに、にししなければならないことがあるである。それはなんであるか。

『はのなり、はがにまします。がもものなるも、がのも、すべてがのなればてに報いん、がにしかくあるべし』とふがそれである。し繰返しくし、にしてひ、をてふによつてににはのにしてくのである。この一にいてはそれのをめたである。

一のもののと、かゝるによつてのみせられるだらう。はに一をされた。しされることにつて一がるのではない。がもしくきになることにつて一はるのだ。かるがに一ののはのにられてるのだ。に一はされてる。はとにのである。しそれはがしいとふことにはならない[[1]](#footnote-1)。がにいてのとなるには、のがであることを、くしなければならない。それはのだ。へし繰返へしのさと、これにしるのをじじにしてひ、をしてずるによつてのみ、の一はめられめられてくのだ。ねてふ。〝一はのによつてのみせられるものである″と。

しのの一をにごしたものがあるとしたら、にの一をしやう。それよりもはここをしやうではないか。

1. この文章は『同胞に寄す』では「併しそれは唯だ格が等しいと云ふことだけでは何もならない」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-1)